

爲に努力して居るのである。

神と俱にある人

佛の面から御光が射したとか、こんな不可思議が在つたとか、ごんな御利益が在つたとか、五色の雲がたなびいて佛陀が現はれたとか、そういふ傳説めきたる事は論外として吾々人間が憐うして生きてゐる、その間の天恵地恵、それを毎日刻々に体験して味はつて見れば、吾々の周囲は皆神であり、彌陀であり、彌勒である。天の恩恵地の恩恵、それ等は悉く神佛彌勒の本体では無いか。一滴の水も、一點の火光も、人の情も、土も太陽も、月も、星も、數へ來たれば皆吾々人間に幸福を與へて居る。感謝の念慮から

想ひを致したならば、宇宙に存在するもの凡てが有難く想はれる。夫が彌陀であり、神であり、キリストであり、彌勒である。木佛金佛石佛繪佛はそれを顯はした所謂大いなる仁恵の具体化したものであつて、その目は慈愛を現はし、其手の舉げられたるは智の光明を顯はし、一方の手は救ひを示したるもの、或は兩手を天地にたゞへ其像全体を宇宙としたその説明も良いだらう。即ち大なる恵みの理想化されたものが佛の像である云つてもよい。吾々日本人から云つたら、日々の生存は神の恵みの裡に包含されてゐるのみでなく、神の生宮である、神の御子である。云はゞ神と神と全体である。現在も未來も神と合体である。佛者の説のやうに十萬億土まで探して行く必要はない。毎日神と俱に生き、神と俱に働き、彌勒の神業に奉仕してゐるのだ。是ほ現實で心地の良いことはない。吾々の生命は永遠無窮に神と共に榮えて行くのである。

金持ちと金番

金持ちと、金番とは違ふ。金を生かして使ふ人を金持ちと云ふのである。金もいさものであるから、自分をよく活かして使つて呉れる人を喜ぶ。活動さして呉れぬやうな主人に對しては、不平があるから、そつといふ所には金が集まらぬ。

水の巻

水の巻

頭髮と人間の使命

髪は神界との架橋である。恰もそれは電線を見たとやうなものであつて、頭髮の多い人程神界との交通が盛に行はれるのである。そして髪の多い人程、天の使命が重大なのである。天の使命が重大なる程又苦勞が多いものである。だから苦勞の多いのは使命の重大なる證左であつて、感謝すべき事である。

老人になると天の使命が些くなるから、従つて頭も禿け、髪も少なくなつて仕舞ふので

ある。私は幾歳になつても此通り、髪が少しも減らぬ。苦勞も多い。使命も重大だ。

頭髮は少くとも一寸位はのばして置くがよい、それより短いのはよくない、女に長命者の多いのは髪が長いお蔭である。

頭髮を度々洗ふと命が短くなる、年に一度位が適當である。多くとも四回を越してはならぬ。

心 心 形

人は心を大きくもつと、従つて体も膨れて来る。心を宇宙大に張り切つて居れば、體も従つて元氣旺盛で張り切つて来る。心を小さくもつと、體もだんく萎びてかじかん。

で来る。小さな心をもつて、小さな事を云ふて居つては、大きな仕事は出来ないものである。

満 月 と 萬 有

満月の日には、萬物が皆膨脹して居る。總てのものは水氣を含んで水々しくなつてゐる。山でも一尺位は膨脹してゐるのだが、萬物が一切膨れるから、人間の眼には分らぬ。白蟻の喰ふやうな材木は、満月の日に切つたものである。即ち木が水分を最も多く含んで居る時に切つたのだから、虫が付き易いのである。

満月の日に生れた子供は色が白い、満月に遠ざかるに従つて色が黒くなる。

樹木の心を汲め

樹木を植るのに私は木と相談してやるから、どんな炎天にどんなつき難い木を植ても枯れた事はない、木の心に従つて、木の思ふやうにしてやるからだ。先づ普通の場合に移植せんとするには、立木の位置方向をよく覚えておいて、其通り植に替はてやればよい。總て樹木と云ふものは、根が痛んで居るだけ葉や枝を切つて仕舞へばきつとよくつくのである。これ相應の理によるもので、根だけ切つて、枝の切り方が足らぬと、根より吸収する養分の量は枝葉を養ふに足らぬので、遂に枯死するに至るのである。又大きな木になると、可成強い枝を切つて弱い枝をのこしておかねばならぬ。翌年に至りて十分ついた事が確實になつてから、だん／＼と強い枝を残して弱い枝を切るやうにする。

かういふやうにすれば、きつとつくものである。

大江山と邪氣線

大江山は日本の悪靈の集まつて居る所である。山の中腹を邪氣線（死線）が六十間位の幅で取り巻いて居る。されば此山に登る事は危険な事である。大低の人間がこの邪氣に犯されると思想迄が悪化して了ふのである。元伊勢の内宮から、外宮にかけて靈線が通つて居る、この靈線は良い線で、これを突破して大江山に登つた大本信者は悪靈の教唆によつて、遂に信仰から離れて行くものが多い。

脊に腹はかへられぬ

木と云ふものは、總て北が脊であつて、南が腹に當つて居る。木を切つて其木輪を調べて見ると、北より南の方が膨れて居る。それで深山などに迷ひ込んで、方向が分からなくなつてしまつた時は、されでもよい、一本木を切つて見れば直方向が分かるものである。木輪のふくれた方向を取つて進めば南に行く、其反對の方向に行けば北に出るのである。

昔から、脊に腹はかへられぬと云ふ言葉があるが、樹木を植ゐる時もこの原則に従つて、元の北を北に、元の南を南にして植ゐてやらねばならぬ。脊と腹とをとりかへて、反對に植ゐるとつき悪いものである。

北はほねであるから、鑛山を掘るにしても、其鑛口が眞北をさしておればきつと出るものであるから、北に北にと掘つて行くべきものである。

千の利休は明智光秀

千の利休と云ふ人は、明智光秀の成れの果てである。明智光秀は山崎の戦に脆くも敗れて、遂に名もなき一士兵の爲めに竹槍にてつき殺されたと、歴史に傳へられてあるがあれは嘘である。天王山の戦で勝敗の決することは、初めからよく承知しておつたが光秀は將士の度々の迎へをうけながら、態とグズ／＼して居て、遂に勝を秀吉に譲つたのである。實は疾くに光秀と秀吉との間には妥協が成立して居たのである。聰明なる光

秀は、たとへ如何なる事情があつたにもせよ、一たん主殺の汚名を着たものが、天下の將軍となつても永續きがせぬと云ふ事をよく承知して居て秀吉に勝を譲つたのである。そして彼は頭を丸めてお茶坊主となり、萩の枝折戸四疊半の中にあつて、天下の大事を論じ、謀を廻らして秀吉を大開の地位迄押しほして仕舞つたのである。彼は實に秀吉の好参謀であつたのである。朝鮮征伐なきも、彼の献策に出たものである。茶室に這入るには丸腰となつてにじり口より入らねばらぬ。元龜天正時代の荒武者を制御操縦するに、もつて來いの場所方法であつた。第一秘密を保つに絶好であつた。後彼は娘の美貌が禍の因をなして自殺を餘儀なくせしめられたと、世に傳へられて居るが、全く跡形もない事である。英雄、英雄を知る諸般機微の消息は俗人には分らぬ。

筆者がこのお話を伺つて、或時の事二三の方々にお話して居りました、偶座に岡山

の太田榮子夫人が居られて、この話を裏書する面白い物語をせられましたので、左に御紹介致します。

太田夫人は、大正九年の頃、聖師様から「千の利休は明智光秀である」と云ふ事を承はつて、それを師匠（お茶の先生）の名倉某氏に話されたさうです。さうすると名倉氏はそれを又家元（當時第十三代圓能齋氏）に話されました、すると圓能齋氏の顔色がサツと變つて暫くは物も云はれなかつたさうですが、太い吐息と共に口を突いて出た言葉は、「まあさうしてそれが分つたのですか」と云ふ事であつたと云ふ事です。そして、更に語をついで、「その事こそ、千家に傳はる、一子相傳の大秘密であつて、後を嗣ぐ長男のみが知つて、次から次へと言ひつたへ語りつぎて、世に知るものが絶えて無い筈です。さうしてそれが分つたのでせう」と聞くので、名倉氏は「靈

覺によつて分つたのです。丹波の國綾部町に、大神通力を供へた聖者がありましてその人の靈覺によつて、其秘事が分つて來たのです」とて、聖師様に關するお話をせられました。圓能齋氏はいたく驚き且感じ入り、遂に執事を派して綾部に參拜せしめ、次で自らも亦參拜せられたさうですが、深くこの事を秘して人に語らなかつた。名倉氏もまた秘して仕舞つたのですが、不思議な事には三人が三人共、相前後して同じ心臓病の爲め倒れて仕舞つたさうです。

太田夫人は「これは秘してはならぬと思ひ、皆さんにお話して居ります」と語られました。一座のものは是を聞いて、今更の如く驚き、聖師様の稱へ盡せぬ御靈覺の程を感じ入りました。そして聖師様がもし、此靈覺によつて訂正さるゝならば、世界の歴史も随分變つて來るかも知れないと思ひました。

雑魚取りの名人

二代がこう云ふた事がある「先生は雑魚取りの名人だから、貧乏したら雑魚を取つても生活が立ちまするなア」と。私は雑魚を取るの名人だよ、鰯取りでも、鰯取りでも名人だ。一つ其秘訣を教へようか。

雑魚でも鰯でも、一二匹試験的に小さい鹽のやうなものに入れて飼ふておく、するど、時を期してその魚が水の上に顔を突出して上つて來る時がある。其時は大川に居る魚も、小川に居る魚も一齊に水面に現はれて來る時だ。此時を外さず網を入れて掬ひさへすればきつと大漁がある。たゞし私は鰯でも、鰯でも鰯でも掬つたりするのでは無いつかんで取る時の方が多い。かういふやうに魚が頭をあげて來た時に、頭の方から電光

石火的にチャツとつかむのだ、なんほうでも取れる。魚の逃げる時間より、こつちのつかむ時間の方が早ければ、取れるのは當然である。皆はそつとねらつて取ろうとするから逃げられて仕舞ふのである。

氣候による植物の植ゑ方

冬は地中深く植ゑ、夏は浅く植ゑるがよい、なぜならば冬は地中が暖かく、夏は地上が暖かいからである。

日本には金は幾何でもある

金云ふ礦物は、位が高いから、さう無茶苦茶に掘つても出るものではない。持主の徳に相應して出て来るものであるから、徳の高い人が持つて居らねば、たとへ有つても出て来ないものである。少しも出なかつた鑛山が持主が變るにドン／＼急に出だす事なきあつて、世の中から不思議がられる事がある、徳に相應するのであるから、さういふ事もある筈である。日本には金は澤山あるのであるが、血眼になつて、私利私慾に狂奔する人達が焦つても、決して出るものではない。

三杓子は天國

御供米を盛るに、神様には三杓子と定められて居るのは、第三天國に一杯、第二天國

に一杯、第一天國に一杯、都合三杯盛る譯だ。八衢は二杯、地獄は一杯である。死後天國に昇らん事を希ふものは、御飯も三杓子盛つて食べるやうにするがよいのである。

出産日と男女

二百八十五日、即ち九ヶ月半をもつて生れるのは男の子であつて、女の子は二百八十日で生れるものである。

牛頭天王と、午頭天王

牛頭天王は素盞鳴命の御事であり、午頭天王はマツソンの事である。牛頭とはソシモリと云ふ事であり、ソシは朝鮮語の牛の事である、モリは頭と云ふ事である。頭はまん丸くもり上がつて居るから、さういふ意味でもりと云ふ。牛頭（ソシモリ）これは前云ふ通り素盞鳴の大神様の事であるが、マツソンは大神様の名を借して、まぎらはしい午頭天王などと云ふたのである。牛と午との違ひである。

お釋迦さんの頭

お釋迦様の頭の髪の毛のぐる／＼巻いてあるのは、葡萄の形を取つたものである。キリストの荆の冠も實は葡萄である、葡萄は救ひを意味するのである。

土瓶や鐵瓶の置方

土瓶や鐵瓶を置く時は必ず、口が東又は南に向くやうに置かねばならぬ。北向や西向においてはいけない、それは死んだ時の置き方である。總べて物は陽に向ふやうにせねばならぬ、又土瓶は敷物が要るが、鐵瓶は疊にじかにおいても差支ないものである。

人相と其性質

ツンと尖つた節のある鼻は、攻撃性を現はす。かゝる鼻の持主は、人と衝突し易く、兎角我意を通さんとする傾きがある。鼻の先が平たくて尖つて居るものは、鼻柱がつよ

くて猪突する傾向があるが、てんと行き詰まつて仕舞ふ。曲り鼻の持主は、親分になり度い、頭になりたいと兎角人の上になりたがる傾向があるが、先が曲つて引込んで居るので、てんと明かん、猶太人の鼻がそれである。鼻としては、小鼻が大きいのが、よい鼻である。

耳は後頭にびたどくつ、いたのがよい、これは天に聞く耳と云つて、一番よい耳である。耳の色が、顔の色よりも白い人は、天下に名を顯はす人である。立つてる耳はよくない、人の事に聞き耳立てる人で、立聞きなんかしたがる傾向がある。耳の上の方が立つて、覆りかゝるやうになつて居るのは、一番悪い、天を塞いで居るのだから、神様の事など聞かしても、斯ういふ耳の持主には殆んど分らぬものである。耳朶の膨れて居るのは福相である。

唇の厚きは淫慾の深さを示し、薄きは饒舌、への字なりに下に向つて曲つて居るのは、根性の悪いのを示す。上唇の出たのは、チヨカナ性質であつて、下唇の出たのは、意地悪の相である。

口は小さくて口腔の廣く、大きいのがよい、口が大きくつても、口腔が大きく廣くさへあればよいのである。

目の奥深いのは智慧の深い證據である。かういふ目の持主は内流が強いから、深く慮りて事を處するから、間違ひがない、目の飛び出てる人は、一寸目先が利いて、利口さうに見るが、外部状態をのみ見る人で、奥がない、かういふ人に阿呆が多い。茶色目の人は長生をする、性質が清廉潔白で、道徳心強く、自制の念が深いから、情慾の爲めに失敗を招く事がない。黒目勝の人は、見た所綺麗だが、情慾が強く、情事の爲め

に身を危くする恐れがある。男の目は細長い一重目がよい。丸い目は悪相である。女は二重目のバツチリとした丸いのが圓滿を表象してよい。女の細い目は淫亂な相である。「女の目には鈴を張れ、男の目にはしんしはれ」との諺は本當である。三白眼は根性の悪い證據。

私の目？、ボンヤリして居て、時に鋭く光る人々が云ふ。見るが如く、見ざるが如き中に人の心を読む。

額は廣い程がよい、狭いのは貧相である。額の四角張つたのは悪相、下額のしやくつたやうに出て居るのは、デレ助で、輕卒な人である。額骨の秀でたのは善い相で、鼻の下の長いのは、世間で云ふ通り馬鹿の象徴だ。

眉は三ヶ月が最上で、些し下にさがつたのがよい。上に向いて居るのは、險惡な相であ

る。毛虫のやうな肩は殊にいけないのである。

男 松 と 女 松

男松と女松とは種類が違ふ。男松は男松を生み、女松は女松を生む。男松にも雌雄があり、女松にも亦雌雄がある。赤い松の中で葉が短いものは、女松の中の雄松である。大抵女松の下には松茸が生れる。神様におあけするのは女松に限る。男松は、本當の松でないのである。

拍 手 の 意 義

左手は火を表象し右手は水を表象す。拍手すると左右合して神（火水）となりて聲を發す、その音タカとなる。アーの言靈は上る意、マーの言靈は圓滿具足を示し、ハーの言靈四方に開くの意を現はし、ラーの言靈螺線を現はす、即ち拍手によりて、神なる聲が天地の間に擴がりゆくなり。

地 震 と 礦 物

地震が揺ると云ふ事は、一方から云へば結構な事である。礦物と云ふものは、地震によつて造らるのであるから、恰も礦物は植物に於ける脂肪のやうなものである。云ひかへれば、岩の脂肪なのだ、地が動揺する事によつて、汗が滲み出るやうに、岩の脂肪

が出て固まるのである。是が即ち金であり、銀であり、又銅であり、鐵であるのである。

神示の若返り法

年寄ると誰でも皺が寄るが、この皺が寄らないやうにするには、平素から顔や體の洗ひ方に注意せねばならぬ。既に寄つた皺を無いやうにして、若く艶々しくなるやうにするにも亦、左の通りすればよいのである。

顔は決して石鹼や、糠袋で洗つてはいけない、唯掌には天然に與へられたる脂肪が常に分泌してゐる、この脂肪こそは、顔や體を洗ふに最も適當なる洗料である。これ以上の結構な洗料は無い、糠や石鹼は顔面の脂肪を多く取るから、其時は垢がよく落ちてさつぱ

りするやうな氣がするけれど、これが皺のよる原因となるのである。顔面の上皮は極薄いもので、其下には醫師も知らぬやうな、細い脂肪腺が、無數にあるのであるから、顔をひびくこすると、この脂肪腺をグチャクにして仕舞ふ。譬へば、薄いく紙を擦れば皺がよると同様である。掌で靜に〜撫でるやうにして洗はねばならぬ。掌の柔かさは最も顔面を洗ふに適して居る。手拭などのやうな硬いもので擦つては耐らぬ。かくの如く掌で靜に〜撫で洗ふ事によつて、皮下脂肪腺がふつくりして居て、いつ迄も其若々しさを保ち得るのである。あまり擦つて一たんつぶれて仕舞つた人は、下記の如くして、其回復を待たねばならぬ。それは、タオルを微温湯につけて、之を顔に當て、五分間位蒸す、かくすれば皮下脂肪腺が口を開いて自然に下から掃除が出来るのである。又だん〜と、脂肪腺が舊状態に回復して來て、小皺がのびて來る。かくて後

タオルでこすることなく、押へるやうにして水を拂拭し、其上に女ならば薄化粧でもすると、滲み出した脂肪は、お白粉下の作用をなして、綺麗になる。この方法を度重ねて居ると、年老つた人も段々若く美しくなる。體も同様、掌で洗ふのが、一番である。但し腰から下は天國に相應しない所であるから、石鹼を使用しても構はぬ、但し石鹼を使用する人は、體に臭氣があつていけない。

筆者附記

右は承はつた体的若返り法の大体です。そしてこの通り實行して居るものは、實際に日にく皺が取れ若返りつゝあります。唯誰もが思ひ切つて從來使用し來つた石鹼や糠が捨てられないやうですが、それでは駄目です。主一無適を標榜しつゝも、これだけはいくら聖師様の仰せでもさう出来ぬと、でもをつけてお言葉を實行しないと御

神徳は頂けないと同様、石鹼をつかつたり、糠をつかつたりすると又後もごりを致します。但汽車旅行などしてひどく、すいけた場合は止を得ないから、糠なき使つてもよいとの事で御座います。

動物の壽命

蜂蟻が五時間、象が二百年、鶴が百年、龜が九十年である。鶴も龜も三日を一年として居る、牛馬は三ヶ月を一年として居て、その割合で年が寄るのである。

戸解

虎、狼、猪、熊、狐、狸など野山に住む獸類、さては鳩、鳶、鳥、雀の鳥類に至るまで、死骸と云ふものを此土にのこさぬ。人に殺された場合は別だが、自然に死んだこれ等の屍と云ふものを誰も見た事があるまい、此等の動物は一定の時が来ると、尸解の法によつて體をもつて靈界に入つて仕舞ふのである。これ皆神様の御恵によるもので彼等が死して醜骸を此地上に残す時、誰も葬式をして埋めてやるものが無いからの事である。それに彼等には慾といふものがないし、執着心も何もないので、實際綺麗なものである。虎狼の慾といふ諺があるけれど、彼等は腹が膨れてさへ居れば、決して他を犯さうとはしない。人間の慾となる恐ろしいもので、其日の糧どころか、一年中食へても、一生涯食へても餘りある程のものを貯へながら、まだ其上他のものを自分のものにしたいと云ふ慾望の絶ゆる時がないのだから、おそろしい執着だ。家畜は死骸を此土

に曝すが、それは人間が始末をしてやるから、尸解の方に依らないのである。人間も同様お互に始末を仕やう事が出来るから尸解の法によらないのである。

金 剛 石

ダイヤモンドは昔阿弗利加などの熱帯地方にて、地質の變動の場合、地熱二千二百度の時結晶して出来たるものであると靈界で聞いた。五百間四方のミカゲ石の中心にあるダイヤモンドの如きは、チャボの雞卵位の大きさである。

風は七五三の律動で吹くものである。従つて浪も其通り七五三というものである。此の消息を知らないで繪をかくと、繪が死んで仕舞ふし、此原則にのつて描くと、松なきはさながら樹が動いて居るやうな感じを起すもので、これを繪が生て居ると云ふのである。

名人の繪にも上の松ケ枝は右に動き、下に立つて居る人物の衣の袖は左に靡いて居る様なのがある、これは嘘の繪だ云ふ事がすぐ分る。風の心になつて描けば風が吹いて居るやうにかけ、浪の心になつて描けば浪が打つて居るやうに見らる、皆天地自然の道理だ。

黒は色の王

黒色は色の王である。どんな美しい色彩も黒が出て來ると皆消されてしまふ。服装も此理によつて、黒色があらゆる色彩を壓倒して勝を占る。

八月のいら蒸

八月のいら蒸といつて、残暑の堪へ難きは又格別である。これは八月になると、大氣は暑中よりも聊か冷却して冷たくなり、人間の皮膚を引き締めるにより、熱は外に發散するを妨げられて内に籠もり勝になる、それでいらくしい暑氣に襲はれるのである。

芋 明 月

芋明月といふのは八月十五日の事で、昔宮中では月見の宴を催し、女官達は芋を箸につきさして、其穴より月をのぞいて見たものである。月にいろくの自分の運命がうつると云ふのである。これ芋名月の名の起る所以。

人間は種々の前世をもつ

人が死んでから再び人間に生れ代つて来るのは、罪があるからである。生れ代るといふても、人間から生れ代つて来て居るものもあり、犬や猫から生れ代つて居るものもあり龍から生れ代つて居るものもある。

佛と神

あの人は佛様のやうな人だといふ人は、お人よしの所謂好人物の代表とはなるが、仕事は出来ぬ。鬼神壯烈に泣くといふ諺がある、勇氣凛々、活氣に満てるが神様だ、神様でなければ働きは出来ぬ。

空の星と人間

空の星を見て居る位楽しい事はない。各自の星が皆空にあるのであるが、今の世の中の人々の星は、多く暗星だから、光を放つて居ないから見ぬ。大臣達だつて三等星か

四等星である。一等星の人なんか世に出て居ない、歴史上の人物で豊臣秀吉即ち大闇さんは一等星の人であつた。近頃の人では西郷隆盛が一等星であつた。其後一等星の人物は出て居ない。

桐

桐は國の木をかいて、亞細亞の國々の樹にもある木である。檜山には檜と桐とが澤山ある。

蠶 蚊

蚊の中で蠶蚊ばかりは棒振から出ないで、木や何かのしげみに生くのである。そして喰いつかなくて唯傍に飛んで居ても人間の血を吸ふものである。

地上に移寫すオリオン星座

「明かなオリオン星座地にもあり」と云ふ冠句が出て居たので抜いておいた。オリオン星座を地にうつすのが月宮殿であつて、敷地も同じ形に出来て居るのである。月の輪臺はミロク様の居られる所である。

奴と云ふ言葉

奴とは親しみ愛し、褒め稱へて云ふ言葉である。古事記に「此奴よら宜ひき」と云ふ文章があり、釋迦や孔子は偉い奴と云ふ文句がある。奴とは智、勇、愛、親の備はつて居るものを云ふのである。

天人の五官

天人は額の目で見るのである、天人にも目鼻、口、それと形はあるが、天人の五感
は皆額である。佛像の白光がそれにあたる。天人の性交は頬と頬とを一寸ほんの瞬間接
觸するだけである。そして靈子は天窓より下さるゝのである。天窓とは現はれる魂の
意であつて、聖上の御體の事を玉体と申上るのは、天窓の体と云ふ事であつて、天窓は

体の一番上にあるから、天窓といふのである。

靈と食物

靈の低いもの程澤山食物を食べるから、かういふ靈への供物は後が不味でいけない。
神様に御供へしたものは、ほんの少し食しあがつて後へ精氣が入るから、それがお蔭で
ある。恰も美しい香袋に手を觸れると移り香が残るやうなものである。通りがかりの飲食
店なきの店に飾つてある餅司なきは、うまさうに見わるが、食べて見ると甚だ不味い、
餓鬼の靈が味を吸ひ取つて行くからである。

月 三 日 月

月と云ふのは三日月の事であつて、其形が劍に似て居るからである。つるぎは言靈學上つきである。ツルの返しツであり、キキの返しキである。即ちツキである。其他の月には、後の月とか、いざよう月とか、望の月とか、皆それ／＼名がある。

植 物 と 精 靈

植物や石には靈はあつても、精靈が無い、これは全く神様の御恵であつて、もしこれ等のものに精靈があつたならば、長い間一所にちつとして動く事も出来ないやうな境遇

には堪へられないであろう、植物も古くなれば木魂と云ふて精靈が入るが、それは世に云ふ天狗が入るのである。だからよく世の人が天狗が松の木にまつて居るなと云ふそれが、松の木の精靈である。

植 ね か へ た 木 の た め

植ね替た木は三年、五年たつても、早天には三日目位に水をやらねばならぬ。水もさ水では駄目である。些し鹽氣のあるものでなくてはならぬ。漬物の洗ひ汁などの雑水がよい、さ水ではすぐ乾いて仕舞ふから効果が少ないものである。

雀の領分地

雀にも自分の持つ領分がある。雀ばかりではない、鳥でも、鷹でも、鳶でも、鷲でも、虎でも、獅子でも、狼でも、禽獸蟲魚皆それ／＼自分の住む範圍、即ち領分があるのである。そして彼等は決してその範圍外には出ないのである。又お互が決して其範圍を犯さないものである。若し他を犯す時は忽ち争闘が始まる。小鳥の領分地は狭い、この光照殿の中心にでも雀の幾群かが住み得る。鷹となるに餘程範圍が廣く、いつも天恩郷の空を舞ふて居るキンミー鷹の如きは、南桑の原野の半分位の廣袤を領有して居る、時に澤山の鷹が飛翔する時があるが、それは彼等の漫遊客である。もし彼等が移住する時は、數百羽打ちつれて行く、斯くの如く萬物其領するところが定まつて居るのであるから、人間に

も亦其領有する所が無くてはならぬ事である。だが鳥獸の類は自分の領分を他に賃貸して金銭を取るに云ふやうな事が無いが如く、人間も亦さうあらねばならぬ。

ドテラの始まり

某博徒の親分が、すつかり賭博にまけて衣類は皆質屋にやつて仕舞ひ、仕方なく夜着を着て居たところ、それが又非常によく似ついて親分らしかつたので、乾兒共がだん／＼真似をした、それが今日のドテラである。

本宮山は平重盛の居城

丸山（本宮山）は平の重盛の居城であつた。本宮、新宮、熊野神社、那智の瀧等皆紀州の地名と同じである。又舞鶴はもと田邊と云ふて居たのであるが、それも同じである。以仁王は重盛を頼つて綾部の地に來られて、遂に薨去されたのである。本宮山の中腹にある治總神社は私が重盛の靈を祭つたものである。

神 木 銀 杏

銀杏と云ふ木は日本以外にはあまり無い不思議な木である。松、梅などと共に前世期に屬する植物であつて、木質に粘り氣があるから、あの大洪水に耐けて來たのである。銀杏の實は、全部精蟲で満たされて居つて、動物の精蟲と些しも異ならぬものである。

其臭氣も全く精蟲と同じであつて、焼くと蒼い色になる、即ち蒼人草の種である。若し適當なる方法で之を孵化することが出来るならば、銀杏から確に、動物が出来る筈である。かゝる靈木であるから、神籬となるに最も適當はしいのである。五十年や八十年では仲々實を結ばないから、實益上普通の人家にはあんまり植われない、大概お宮やお寺かさういふ所でないに植われないやうである。彼の三十三間堂の棟の柳と云ふのは、其實銀杏の事である。

天 恩 郷 の 命 名

天恩郷を南北に別けて、月照山の以北を萬壽苑と名づけ、以南を千秋苑と命名した、

光照殿の前より、聖観音様の前に通ずる道路を観音通、天聲社前より、瑞祥閣に達するものを瑞祥通、瑞祥閣前、及び温室西側より大祥殿に通ずるものを大祥通、温室前より安生館に至り、表通に通ずるものを大手通、炊事場より鏡の池に達するものを眞名井通、神集殿敷地の裏通の最高地を國見峠、其以西を西阪、東を東阪、東阪より大手通に達するものを極樂通と命名した。

水鳥の温度

水鳥は其体温平素四十度以上に達するものである。故に嚴寒骨を刺す水の中で平氣に遊弋して居るのである。彼等はこの冷たさが寧ろ快感を覺わしむるのである。

樹木のいろく

檜は素蓋鳴大神様の頭髮を抜いて蔭かれたもの（勿論比喻）なれば神様のお宮より外使用せぬものである。松杉は人家に使用し、檜は尻の毛を抜いて蔭かれたから棺桶に使ふものである。是は古史成文と云ふ書物にのせられたる、素蓋鳴命の御神勅である

墓の台石

墓石は四寸角、二尺の高さが普通である、臺石は、一番下が二尺角の高さ四寸、其上が一尺六寸角の高さ四寸、其上が一尺二寸角の高さ四寸の三段にするのがよい、もしそ

しそれが小さいと云ふのならば倍加したらよいのである。

字 と 筆

字は筆の軸の先をもつて書く程よく書けるものである。ペンの字でも同じ事である。それに先をもつて書けば、字が眞直か、曲んで居るかもよく見ゆる、第一先の方をもつて書けば一息にかけるから、筆がぬけない、筆が抜ければ字はどんなに立派であつてもそれは死字である。

與 謝 の 海

與謝の海はヨサの海と訓む、往昔素盞鳴命が覽はして、ヨサ、ヨサとお賞になつたのでしか名づけられたのである。ヨシヤと讀んではいけないのである。

死者の枕する方向

死者の枕する方向は、佛教では頭北面西とて、頭は北に顔は西方淨土に向ふさだめとなつて居るが、大本では頭を高天原、即ち神のまします綾部の方に向けるやうにするのが本當である。

結婚と男女の年齢

結婚する男女の年齢は十歳の方が最も理想的である。なぜか云へば男は三十歳にして、女は二十歳にして完成するものであるから、完成したものの同志の結合が一番よいのである。

耐寒力と飲酒、肉食

野菜を食するものが一番耐寒力が強いものである。肉食をするものは血液が粘つて居るので血液の循環が悪く、肉食をした當時こそ耐寒力もあるが、食せぬ時は一層甚だしく寒氣を感じるものである。飲酒家に至りては血液の粘る事一層甚だしく、アルコールを以てするに非ざれば、血液の循環を速かにすることが出来ない、従つて酒を止める

甚だしく寒氣を感じるものである。雪に凍りたる道などを行くに、飲酒の習慣ある人は其寒氣に堪へ兼ね、飲酒を少しづつ居らざれば血液凝結して死に至るものである。

田植

苗を田に移すには、種を蒔いてから四十八日目から初める。そして四十九日目を選びるのが普通である。これは四は死に通じ、九は苦に通ずるので、縁儀を祝ふ百姓としてこんな迷信的習慣がある譯である。

人間は木から生れた

足魂から生魂が出る。大きな木が腐つて人間が生れた。恰も小豆に虫が発生し、襟に甲虫が出来、また栗の木から栗虫が出来るやうなものである。」

胞衣と岩田帯

胞衣は然るべき壺に納めて、床の下か、或は家の外で、人のあまり踏まぬ適宜の場所へ埋めるがよろしい。然し今までに既に埋めた人は、右のやうにせなかつたからと云つて、埋めかへせなくともよろしい。また岩田帯については別に儀式はつた事は要らない。神様にお願ひしたらよいのである。

一 星 霜

太陽は一年に二度廻る。即ち春分から秋分迄に一度廻り、秋分から春分迄にも一度廻る、だから一年に二度廻る勘定である。月は二十九日と數時間で一週してもその位置に還つて来るし、星は一年に一週り（太陽系天体内）する、それで一年の事を一星霜と云ふのである。（流星や慧星は別として）勿論星自体が廻るのでなく、地の傾斜運動による事は、靈界物語に出て居る通り、云ふ迄もない事である。」

虫の觸角と鳴き聲

鈴虫や松虫には長い觸角があるが、あれは面白い働きをするものである。即ちあの長い觸角は、ラヂオのアンテナと、擴声器とを兼ね備へたやうな働きをするのである。今一匹の松虫の雄蟲が鳴いたとすると、其聲は觸角に傳はつて強められ、高められて數丁乃至、數里先の雌蟲に達する。幾何松虫の聲が高いからと云ふて、マサカ數里先の雌蟲に達すると云ふのは信ぜられない話であるが、そこは神様の深い思召があつて、雌蟲の頭には、ちやんと觸角のアンテナが用意してあるのであつて、此觸角のアンテナに感應して、數里先の雄蟲の鳴き聲が、ハツキリと聞き取れるので、呼び出しをかけられた雌蟲は大喜びで聲を便りに飛んで行く。勿論戀しい自分の雄蟲の鳴き聲を、外の雄蟲の鳴き聲と混同するやうな事は決してない、ちやんと各自の雄蟲の所へ飛んで行つて、甘い戀を囁きつゞけるのである。彼等の鳴き聲は決して人間を慰むる爲めではなく、種屬繁榮の爲の

本能の叫びである事は、人皆がよく知つて居る通りである。鶏のトサカの如きも同じ働きをするもので、鳥や蟲が一足お先にラヂオを實際に使用して居るのは面白い現象である。

開祖様の奥津城

靈界物語二段目の水獄とよく似通つた場面を蒙古で實際に目撃した事が屢々あるが、墳墓の如きも其一つである。蒙古では人間の死骸を地を堀つては埋ない、平地の上において、其上に土を被ふせるのだから、土饅頭が出来るのであつて、至つて簡單なものであるから、どうかすると直土饅頭が壊れて、饅頭がごろ／＼と轉び出す、随分氣味の悪

いものである。蒙古では地中に深く埋る事を地獄にやるのだと考へて居るので、こんな埋葬の仕方をするのである。地下三尺以下は地獄に相應するのであるから、この信念は一理あると云はねばなるまい、大本の教祖様の奥津城は左の通りに築かれて居る。先づ地上より二尺五寸高いコンクリートの臺を据へ、其上に同じコンクリートで箱を作り、其中に御遺骸を納めた棺を入れ、蓋をなし、其上を又コンクリートで塗つて、所々に空氣抜の穴を穿つてある。其上を又石で圍んであるので、地を掘つて埋葬しては無いのである。

因にこの奥津城は築き直されてからの方が、私の計劃通になつて居るのは、不思議である。私が嘗て、こんな具合に築くのであると、描いて渡しておいた圖面が、舊役員の所に残つて居るが、それを見た人達は驚き合つて居た。私は初めから今のやうな形にせ

うと思つて居たので、桃山御陵に似て居るとか云ふあゝした形にする積では無かつた。私の云ふ通りにして呉れないから、神様が官憲の手を借りて、本當のものに直されたのである。役員の中には奥津城を直させられたと云ふて、随分官憲の所置に憤慨して、矢蓋しく云ふたものもあつたが、かう分つて見ると、どちらが悪いのか分つたものでは無い。

地震の前兆

空が馬鹿に静かになり、井戸水が不意に濁れ、或は湯のやうになる。さう云ふ時は三日と経たぬ中に地震が来るものである。此地震の危害から免れるには、田の中に板を敷い

て掘建小屋を立て、居ると安全である。

御神靈を鎮める時

御神靈をお鎮めする時、今迄は燈火を消して暗くしてやつて居たが、もう岩戸が開いたから今後は燈火を消すに及ばぬ、明くしておいてやらねばならぬのである。祖靈さんも同じ事である、明くしておいてせないと、邪靈などが、暗に乗じて祖靈さんの鎮まる先に鎮まつて仕舞ふ事がある。某所で某氏が祖靈様をお鎮めすると、靈舎が動いたと云ふて大變に喜んで居たが、私がいつて調べて見たら何の、祖靈さんは鎮まらないで動物靈がすまして鎮まつて居た。私が鎮めたのは一向動かないと云ふて、大先生よりもお弟

子さんの方がお鎮めなさるのはお上手である。お弟子さんが鎮められた時には、神様は喜び勇んで動き出されるけれど、大先生のはちつとも動かぬと云ふて不平を並べられた事もある。「弟子は祖靈さんを鎮めないで、狸を鎮めた」とも云へないし「私はさうも祖靈さんをお鎮めする事は仕つけないから下手である」と云ふて逃げて歸つた事がある。

墓場跡と飲食店

墓場跡などに普通の人家を建てると、亡靈のために種々の煩ひを受けることがあるが見世物小屋とか、飲食店とかをさういふ場所に出すと、大層繁昌するものである。なぜかと云ふと、祭り人の無い餓鬼共が、飲食にありつき、又面白いものを見て喜んで、次

から次へと呼友をぶからである。素より是等の餓鬼共は、通りがりの人等に憑依して飲食するので、其人間が見世物小屋なり、飲食店なりの前を通ると、急に食物が欲しくなり、又見世物が見度なくなつて飛び込んで来る。そこで大入満員の大盛況を來す事となるのである。だから斯ういふ商賣をして儲けやうと思ふなら、墓場跡を選ぶのが第一番であらう。

南 天 と 蓮

南天と云ふ樹は、南の方へ向つて繁殖するものである。南の方角にある南天を北或は其他の方角に移植すれば、大抵の合枯れる。これと反對に北の方から南へ移植す

るならば、きつとづくに定まつて居る、これ南天の名がある所以である。數百年を経た古木だといふと、移植はむづかしく、大概枯れて仕舞ふものである。現在の所であれば弱つた根からも養分を吸収する事が出来て居ても、他の土地に移すとさうした力をもつて居ない、南天と云ふ木は移植した年はついて居るやうに見えて居ても、一二年経つて枯れるから、餘程よく方角を考へて移植せねばならぬ。蓮は又反對に東南の隅にしたがよい、さうすると西北に向つてどん／＼繁殖してゆく、西北に植ゑたら、だん／＼と減つて行く一方である。

神 標 の 一 年

神様の一月と云はるゝのは一年の事であつて、一つづつと云ふ事である。で神様の一年と云はるゝのは人間界で云ふ十二年の事である、教祖は三年辛棒したら大本は結構になると仰せられたが、三年とは三十六年の事である。明治二十五年から三十六年目、即ち大正十七年から結構になるのである。私はこの事を度々舊役員に話したが聞き入れずに、三年どころか、十年経つても一向結構にならぬと、愚痴ばかり並べたものであるが、大本も今年からだんく結構になりかけたのである。

家畜と人間の唾液

人間の唾液は家畜には何等の影響もないが、野獣や、蟲類のためには非常に害になるも

のである。であるから彼等は人間の唾液を非常に怖れる。彼の蜈蚣の如きは、唾液をかけるに、直ちに色が變つて仕舞ふ。犬や猫の小さい時、人間が食物をよく噛んで食べよいやうにして與へる事があるが、野獣はそんなものを食べさすと中毒を起し、甚だしいのは死んで仕舞ふものである。

山上の家

山の上に堀つ建て小屋なきをたてた時には、其周圍に三尺の間隔をもつて、繩をグルリと一廻しておかねばならぬ。さうしておかないと、靈に襲はれる。又普通の人家でも、縁側なきに寝てはならない、必ず家の礎から三尺内側に寝るべきものであつて、

さうせんどこれ又靈に襲はれる。石は悪魔をふせぐものであるから、礎から三尺以内には寝むれば大丈夫である。

寝る時の形

寝る時はさの字のやうな形がよい。仰向に寝ると鼠に呼吸を合せられた時に耐え切れなくて、病人なきになると死ぬ事がある。鼠が呼吸を合せると云ふのは、俗に云ふ襲はれることであつて、人間の吐く息を天井で鼠が吸ひ、鼠が吐く息を人間が吸ふので、かかる場合寝てゐる人間は苦しくつて息がとまりさうになり、ウン／＼と唸るもので、自分の唸り聲で目が覚める事もある。此時仰向に寝たる弱い人だと、遂に目が覚めず、それ

なりになる事があるのだ。襲はれる場合には人が傍に居て起してやるよりいけれど、一人だどさう行かないから、右の脇腹を下にして、さの字の形に寝てさへ居れば大丈夫である

狛犬の事

狛犬は、神功皇后が朝鮮を征伐せられた時高麗王が、降服の印にとて持つて来たもので將來は、犬になつて日本に仕へますと云ふ意味を表はしたものである。それで高麗狗と云ふのであるが、口をつまへて居るのが唐の王で、あけて居るのが向ふの王妃に型どつたもので、夫婦アウンの息を合して神國に仕へる云ふ意思の表徴である。

大安石と小安石

伊都能賣觀音様の前に据わられた二つの石がある、平たい方を小安石と名づけ、もう一つの方を大安石と命名し、どちらも鎮魂して平安石と同じく病氣の人達がお蔭を頂くやうにした。小安石は一名赤子岩と名づけられ、赤子の足跡があると云ふので有名な岩である。南桑田郡曾我部村法貴谷はこの岩があつたため、名所になつて居た程であるから、普通では仲々手に入らないのであるが、天恩郷に上るのなら結構であるとして譲つて呉れた。この岩には小兒の病氣平癒をお願いするがよい、又子の無い人は子實を得るやうにお願いするがよい。赤子の足跡だと云つて居るが、實は天人の足跡である。大安石は總ての病を癒して頂くのであるが、特に胃腸等腹部の病に結構である。靈を入れると云ふ

ても、私は唯岩に命令をするだけの事で、命令を受けると、其時から直ぐ石は其働きを起すのである。

面會の事

私はどういふものか昨年来から（昭和元年、即ち大正十五年）人に面會することが嫌になつて来た。近頃はそれが一層ひどくなつて、未信者は勿論の事、役員信者と雖も面會することが極端にいやになつたのだ、近侍と雖も餘り大勢が長く傍に居られる事は苦痛なので、用事があつて呼ぶ時来て呉れ、ばよいと云ひ渡してある。私は肉体として出て来るだけ辛棒して居るのであるが、神様が嫌はれるのだから仕方が無い、特に朝早くか

ら來られると、それつきり神様の御機嫌が悪くなつて、其日一日の仕事が駄目になつて仕舞ふ事がある。だから面會時間は午後の五時から六時の間に定めてあるので、其頃になると、爲すべき仕事一段落つき、夜の仕事との間に一寸一服する間があるから、餘り邪魔にならない。かく定めてあつても、今日は早く歸らねばならぬとか、綾部にお参りせねばならぬとか、特別をもつてとか、自分の都合の爲め、朝から面會を強いらるゝのは苦痛でたまらぬ。私は神様に使はれて居るのである。人間の都合の爲に神様の御用を左右するのは餘りでは無いか、私は其ため命が縮まるやうな氣がする。私に長生をさせようと思ふなら、少し氣をつけて貰ひ度い。早くから信仰して居る人達はかういふ事がよく分つて居らねばならぬ筈であるのに、舊いが故に特別の權利があるやうに思ふて、規定を無視して自分の知己を連れてズン／＼押しかけられるのにも困る。遠方から來た

のだから、十分や二十分時間を割いて下さつてもよかりさうなものだと思ふ人があるかも知れぬが、私の十分間は他人の十分間と違ふ。十分間あれば約百五十枚の短冊を描く事が出来る。一時間も邪魔されると、九百枚も駄目になるのである。それにまだそれよりも困る事は、各自がいろんな靈を連れて來て、それを置いて行く事である。非常に氣分がよくて、是から大に仕事をせうと思つて居る所へ、一寸人が來て其人が、惡靈でも背負て來て居たら、すぐ頭が痛くなり、氣分が悪くて一日何も出來ぬ事がある。のみならず甚だしい時はウン／＼と唸つて寝なければならぬ事になる。私の体は人並にゆかぬのであるから、それを察して貰ひたい、用がある場合は此方から呼ぶ事に仕度いのである。

白髪が増えぬ法

白髪が出来か、つたらすぐ抜いて仕舞つたらよい、放つておくと次から次へと増わて行くものである。

雑草は彼岸前に刈れ

夏の頃盛んに繁茂した雑草は、必ず彼岸前に刈り取つて肥料にせねばならぬ。秋の彼岸後になると、養分が皆地に下つて仕舞ふから、肥料として価値些ないものとなる。之に反して、柴は彼岸後に刈るがよい、水分が地に下つておるから、よく燃わる。

生前に銅像を建てゝはならぬ

生前に銅像を建てゝはならぬ。命が短くなる、大抵それを建てゝ〇年するときつと贈幽するものである。木像は構はない、私は自分の銅像は建てぬ事にして居る。私の像は十三段の石の塔である。臺迄よせて十八になる。即ちミロクの意味である。

ラヂオは氣候を調節する

西村さんが佛蘭西から歸朝の途次西比利亞を通過して、氣候が案外暖かであつたこと云ふて居たが、近來地上の氣候はラヂオ使用の爲め大氣に大變化を來たして居るのである。

神論にある「世界中を柝掛け曳きならず」と云ふ事を皆が小さい意味に取つて、國土とか、經濟とかの上とのみ思つて居るやうであるが、神様の柝掛け曳きならしはそんな狹義の意味のものでは無い、氣候迄も柝掛け曳きならされるのであつて、ラヂオも其働きの一部分を勤めてゐるのである、ラヂオは音波を輸送する如くに、寒氣、熱氣をも輸送するもので、寒帯の寒氣は熱帯に運ばれ、熱帯の熱氣は寒帯に運ばれて世界中の温度が段々平均して來るのである。平均すると云ふても、比較的の事であつて、熱帯は矢張り暑く、寒帯は冷たいが、寒暑の度が今迄のやうに劇烈でないやうに調節されるのである。温帯は餘り變化は無い。「北がよくなるぞよ」との神論も亦這般の消息を傳へて居るのである。又大本祝詞の「暑さ寒さも柔かに云々」とあるも此事である。

花は皆太陽に従つて廻る

花は皆太陽に従つて廻るものであつて、日出時は皆東に向ひ、日没の時は西方に向つて居る。獨り向日葵のみが太陽に従つて廻るといふ譯では無いので、あの花は大きいから目立つてよく分るが、外のは一寸氣がつかないのである。獨り花のみではない、木でも草でも其眞は常に太陽に向つて居り、其運行に従つて廻つて居るのである。

惟神の寝方の

惟神の寝方と云へば、時計の針の如く、くるく廻つて夜の十二時には頭が北即ち子

の方向に向ひ、二時には丑、四時は寅、六時には卯、八時には辰と云つた風になるので、子供が東枕に寝さしておいても、いつの間にか南枕に廻轉して寝て居るのは、惟神の寝方に叶つて居るものである。

雪の豫告

雪の大層降る年は、茶の花が下を向いて咲いて居るからよく分る。單に茶の花のみならず、冬咲く花は皆其通り下を向いて咲いて居る。花のみならず、枝も用意をして下へ下へと張つて居る、重力を支へる準備を春からしておるのだ。偉いものである。人間は萬物の靈長でありながら、一向さういふ事を知らないで、ほんやりして居るやうである。

み さ さ さ き、 か さ さ さ き

陵は水幸はふと云ふ意であり。かささぎは火幸はふと云ふ意であつて、大極殿の事である。かの有名な「鵲の渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更にける」と云ふ歌は、大極殿に霜が置いたのを詠んだのである。

取越日記

取越日記について皆が取越苦勞をして居ると云ふのか、ハ、ハ、何でもない事なのだ、日記帳に歌日記を書きかけたところ、一年中の日記が半月で済んで、一月の間に二ヶ年

分を使つて仕舞つた。見るに上部の豫定欄、通信欄が白紙として残つて居るので、勿体無いと思つて、其日附に合ふやうな歌を書きつけていつたのである。別に意味も何も無いものであるが、神様が意味を持たざるれば、それは何とも云へないけれど、私は豫言的に書いたのでは無いのである。

草花より生ずる蟲

或時聖師は花園の中に立ち筆者を招かれました、參つて見るに虎の尾に似たる、名のしれぬ草花を手にしながらふつておられました。中から無数の羽の生へた小さい蟲がでんで出て居ます。

「氣候と温度との具合で、種が蟲に變化したのである」と仰しやいました。「種が蟲になる、種が虫になる」不思議な事もあるものと訝かしみつ、手に取つて他の花をふつて見るにバラ／＼と黍の實が殻からおちるやうにきれからも／＼無数の小虫がで飛で出る。「麥を收穫れるに際し、濕氣を十分取り去らないと麥は皆小蝶に變化してたつて仕舞ふ事は、農民周知の事實である。何の不思議もない、足魂は生魂、玉留魂に變化し得る素質をもつて居る。虫は蒸し生ずるの意にて、土から蒸し生かされるものもあれば、木から蒸し生かされるものもある。栗の木から栗虫がわくが如きもそれである。人間は身体を初め木から蒸し生かされたのであるが、今は夫婦によつて造らるゝ事になつたのである。草の實が羽虫に化したのに驚く程、今の人間は誤れる學問に煩はされて痴呆になつて居る。人間が最初に木から蒸し生かされたこと云ふ事を立證して行けば直に博士になれ

るよ「い

筆者はやがて戀月氏をよんで虎の尾のやうな、名無し草の種から羽虫が出て来る實況を見せました。戀月氏も成程——と不思議さうに首肯いて

「學説が根底から覆へる。植物學も、昆蟲學も、我等に植物から昆蟲が生れて來ると云ふ事を決して教へては呉れなかつた。だが事實は鐵よりも堅く冷たい」
と呟いて居られました。

女　と　蛇　と　馬

女が蛇や馬に魅られると叶はぬ。一度魅られたが最後命を奪はれねばやまぬのである

だから決して不用意に草原だとして不淨を漏らしてはならぬ。ちやんと便所で用を達すべくきものである。馬に魅られるのは多くの場合處女である。そして赤い布に痛く心をそ、らるゝものであるから、注意せねばならぬ。蛇に犯さるゝ女、馬に狙はるゝ女、過世の因縁因果もあろう。大神様を信じ、其御加護を頂くより外、防ぎやうが無いのである。

靈　木

三百年を経過して居る樹には靈が入つて居る。これ等の樹は切らない方がよい、若しどうしても切らなければならぬ場合があつたら別に一本の樹を植て、それに靈を移して然る後切るがよい。かゝる場合、言靈で宜り直すのである。即ち「この大きな木（前

のが直經二尺あれば此度のは二尺五寸に移つて下さるゝと、いふ風にいふのである。

森林を切る場合には大きな木を一本残して切つたらよい、靈のあるものは皆其一本の木に移つて貰うのである。

靈木を切つて崇りを受けて苦しんで居る人も、前述の通り若木を植へ宜り直して其方の靈に移つて貰つたら、それで直るのである。靈の宿つて居る木を切ると、靈の宿が無くなるから靈が怒つて崇りをなすのであるから、宿が出来ればそれでよい譯である。

盲腸は人体の根の國

盲腸は人間の體の根の國にあたる、惡靈の集まる場所だ。盲腸を病むと醫師はよく切開手術を施すが、それは危険な事である。盲腸炎といふ病氣は、外に活動して居た惡靈が、神様のお光に遇ふて居た、まらないで盲腸に逃げ込んで、そこが満員になるから起るのである。

盲腸は惡魔の根據地であるから、病氣をそこに押し込めて置くやうなものだ。其根據地を破壊すればよからう筈が無い、

日本人の肉体

日本人の肉体は、他の人種よりも組織が餘程完全に出来上つて居るから、創をしても

すぐ肉が寒がつて仕舞ふものである、肉が刀物に吸ひつく位な力がある。だから指など切つて落しても、直拾つてくつ、けて糊帯でもしておけば附着して仕舞ふが、西洋人は組織が弱いからさうは行かぬ、かういふ現象の起るのは食物の關係であつて肉食と菜食との相違から來るのである。かく日本人の肉體組織は完全であるから、腫物などが出來ても切開せずに癒るが、西洋人は切開して手當をせねば癒らぬのである、かういふ風に肉體が違ふのを知らずして、西洋人の眞似をするのは間違つて居る。日本人の生肌斷はいけないが、西洋人は止むを得ない。

昔の武士は槍をもつて敵につかれると、いきなり刀を抜いて槍を切つたものである。槍を敵に引き抜かれるが最後、血が出るから、其場で斃れて仕舞ふのであるが、前云ふ通り日本人の肉體は勝れて居て、かゝる場合刀物に吸いついて仕舞ふから、抜きさへせ

ねば決して血はこぼれないから、暫くの間は命が保たれるものである。よく劇などで刃を腹へつき立てた手負ひが物語をする場面があるが、同譯で突き立てただけでは決して死ぬものではない、其刀を引き廻すと死ぬのだ。

「やれ其刃引き廻す事暫く待て、云ひ聞かす次第あり」

なご上使が來る所があるが、此處當は日本人には出來るが、肉體組織の弱い西洋人には出來ぬ。直疵口がワクンと開いて血が流れ出して仕舞ふから。

日本人はこんなに優秀に出來上つて居る自分の肉體の事さへも知らずして、無暗矢鱈に西洋かぶれをして居るのである。昔の武人はこの呼吸をよく知つて居て、槍なごで突いた瞬間に手際よくサット刀物を引き抜くのである、早く抜かねば、身が吸いついて抜けぬやうになつて仕舞ふ。突かれた方はこれもほんの瞬間に敵の武器を切つて血を出さぬ分

別をしたものである。かうして遺言なり、跡始末なりを遺憾なくやつてさて徐に死を待つたのである。

白血球と赤血球

白血球は体の養を司るものであり、赤血球には靈が充滿して居る。又靈の交通運輸の役目もする。赤血球百に對して、白血球一の割合が普通である。二千對一位になると體が弱い。

深呼吸の害

深呼吸は人體に取つてよくない、譬ば樂燒をしてゐるあの電氣竈。八百度の熱をかけべきところへ、千度の熱を加へるとヒューズが切れると同じやうに、却つて身體の具合が悪くなるものである。矢張り自然其儘の呼吸が一番結構である。

癩病と肺病は天刑病

癩病、肺病共に體の組織が破壊される病であつて、どちら共天刑病である。癩病は外部に起る天刑病、肺病は内部に起る天刑病である。普通では仲々癒らぬ。餘程深い信仰に入らねばいかぬ。「云うて聞かせてやりたいけれど、今の人間は慾に呆けて居るから、取違ひをするから」とて、教祖様もとう／＼平癒の方法を示されなかつた。

葱と呼吸氣病

葱は肋膜炎や肺病等に特效あるものである。元來葱は其成分中に殺菌劑と精力増進劑とを兼ね備へて居るのであるから、非常に結構なものである。但其用法は刻んだり、煮たりしたのでは効果はない、生の儘一寸五分位にちぎつて味噌をつけて食するのである。ことに醬油の諸味をつけて食するのが一等である。

脚氣の妙藥

脚氣に罹つた人は、伊勢海老を黒焼にして、それを粉にして吞むがよい。

癩癩

癩癩を病んで引つくり返つて居る人間があつたらその足の裏に、良の金神と墨で書いてやると正氣に返るものである。

熱と病氣

病中に熱が大層出るのはよい事である。病氣と體とが戦つて居る爲めに出るのだから、熱が出れば出る程結構な事で、病氣は其爲めに驅逐されつゝあるのである。然るに熱が出て居るのを冷したりすると、火に水をそぐやうなもので、病氣に加勢することにな

る、肺病患者などに始終熱が出て来るのは微菌を殺さうとして居るのである。

カタバミの葉

お腹がひどく痛む時、カタバミの葉を二三枚お臍の上のせておくとも直癒るものである。

平安石と眼病

平安石にお祈りをすれば、こんな病氣も癒るが、取わけ眼病に一番効驗が現はれるの

である。一路平安に行くのには眼がよくなければならぬ、それでしか命名したのである。草や木に種々薬になるものがあるが如く、石にも眼に利く石、腫物に利く石とそれく使命が違つて居るから、其使命を保つた石を使用せねばならぬ。先日綾部から歸る道すがら、自動車がパンクしたので修繕の了はるまで待つて居た其間、一寸山に登つて見たら腫物によく利く石を見つけたから、持つて歸つて來た。これに靈を入れて腫物で困る人にやろうと思つて居る。

創をした時

創をしたり、腫物が出來たりした後は、暫く梅を食べないやうに心掛けねばならぬ。

梅を食べると、其後が赤い痕となつて生涯癒らぬものである。

感冒の妙薬

感冒に罹つたら、味噌仕立ての熱いお粥をこしらへ、それに澤山葱を刻込んで食し、暖かにして寝る時は、きつとぬけるものである。もし一度でぬけぬならば、何度もぬける迄やつたがよい。一体風邪と云ふものは狸の靈の作用であるから、狸の嫌ひな葱を澤山食べれば自然になほる譯である。

病氣の手當二三

直腸癌には御神水を灌腸してやるによい、章魚にあたつた時は、生紙を煎じて飲むと直癒るものである。田螺と蕎麥粉とを食ひ合すと流産する恐れがあるから注意せねばならぬ。

瘤を取る法

瘤を取るには、無花果の葉の搾り汁即ちあの乳のやうな汁を取り、それを塗りつけて置くやがて取れる。

傳染病根治法

傳染病は總て惡靈のなす作用であるから、それを根絶しやうと思へば、年に一度位俄鬼に供養してやるによい。團子を作り河縁において町寧に慰靈祭をすれば、決して惡病は蔓延せぬものである。

火傷の妙藥

火傷の藥は母汁に如くものは無い。これをつけさへすればどんな火傷でも直痛みが止まつて、平癒してから決して痕跡を止めるやうな事は無い、此事は古事記にも出て居る。

因に母汁と母乳とは違ひます。混同されないやうにお願ひいたします。

柿は毒消し

私は柿が大層好きである。果物の中では柿が一番美味しい、柿は又毒消しの働きをするものであつて、夏の暑い時から、秋にかけていろんな悪い食物を食べてた毒が秋になつて出て来るのを、柿によつて消して仕舞ふやうに出来て居るのだ。單に柿のみならず神様は季節々々に人体に必要なものを出して下さる。春は人間の體が柔かになつて来るから、筍のやうな石灰分に富んだものを食べさすやうにちやんと用意してあるのだ。故に人は其季節相應のものを食べて居れば健康を保つ事が出来るやうになつて居るものである。今のやうに夏出る西瓜を春頃食べて見たり、春出るべき筍を冬食べて珍味だと喜んで居るのは間違つて居る。それだから人間がだん／＼弱くなつて来るのであ

る。總てが間違ひだらけである。

大 蛇 と 毒 氣

山で大蛇の毒氣に當つて大病になつたとか、死んだとか云ふ話がよくあるが、それは大蛇の毒氣にあたるのでは無く、驚きのため人間自體に發生する毒素のために犯されるのである。人は又怒つた時にも同じ作用を起すものであつて、其毒は病の原因となるのである。私が怒る時大きな聲を出すのは、實はこの毒素を放散せしむるためである。

痔 疾 の 妙 藥

痔の病にかつたら、鴉を一羽料理して焼きたるを、味噌汁に仕立て、食すると直に癒るものである。

又、葱の白根を、おろし金でおろし、紙にのべて局部に宛ておくもよく、白根の切り口にて局部をこするも効多し、多少しみて痛むものなれども、大層よく利くものである。靈的に云へば痔はドブ狸の作用である。

呼 吸 に つ い て

呼吸は兩方の鼻の穴から吸うて、又出して居るやうに、多くの人は思ふて居るが、さうではない、左の穴から吸ふて、右の穴に出して居るので。試みに一方を塞いで實驗をして見ればよく分ることである。

泥 は 藥

天恩郷洗心亭の湯が時々泥湯になることがあるが、それは甚だ結構な事である。抑々人間はお土からむしわかされたものであるから、土は人間に取つて甚だ結構なものである。さういふお湯に入るのは温泉に入るやうなもので大層樂になるものである。お土はそれ自体が藥になるから、病氣の時にはお土を解かして飲むとよく利く、又お腹の空い

た時には土を食べてもよろしい、私は嘗て伏見から綾部迄二十五里の道を、何も食べる事が出来ないで歸つた事があるが、其時赤土を取つて水に溶かして飲んで食物の代用とした、そして無事綾部に歸りついた。土と云ふても大本のお土さんのやうに粘り氣のある土でなくてはいけぬ。

泣く病人は死ぬ

病人がメソソ泣き出したら死ぬ。靈界物語は常に人々を明るい愉快な樂しい氣持になすやうに口述せられて居る。病人には成るべく面白おかしい所を讀んで聞かせて氣持を樂しい方面に轉じさせ笑はせてやる必要である。

病 氣 と 脈 搏

古今を通じて醫師は「脈が確だから此病人はきつと全快する。」と云ふやうな事を云つて、脈搏をもつて病氣を測定するの必須機關と考へて居るが、さう許りは行かないのである。獸脈と云つて憑依靈の脈が確かに打つて居るのを、人間の脈と誤診する場合が多々ある。併し今のお醫者さんにはこの差別は一寸分るまい。

病 氣 と 藥

一、喘息は樞の實を煎つて毎日食べるとよい、樞の無い場合には蠶豆を煎つて粉にして

食べてもよい。

一、熱のある時は蚯蚓の乾いたものを煎じて呑むとよい、水を呑む事もよい事である。

一、胃癌には鹽のニガリを盃に一杯位一日量として飲むとよい、單に胃癌のみならず子宮癌、食道癌などの癌種には皆よい、盲腸炎、胃病、膈、口中のたぐれなごにも有効である。

一、下痢、赤痢、コレラ等の病氣には一本の寒天の四分の一位を煮てトロ／＼となし、固まらないうちに白湯一合にて飲むとよい、此故は微菌を全部寒天の中に吸収して仕舞ふて排出するからである。

一、腎臓病には、オバコ（根葉共）の生のもの百五十匁を煎じて飲む、これは一週間の量であるから一日量約二十匁強にあたる。生のものを得られぬ場合は干したのでは

よろしい、オバコは又他の腫病にも利くものである。

一、蛇に咬まれた時は山ぜりを揉んでつける。

一、蚊に咬まれた時には生て居る蚯蚓をこつき御飯粒と練つてつける。

一、眼病は鰻の腹綿を毎日一回づつ生で食すとよい。

一、梅毒には人の入った風呂の脂を飲むとよいので、風呂の湯に手拭をあて垢など入らないやうにこしてのむのである。

一、胎毒には垣根を結びたる腐れ繩を黒焼きにして、其灰を燈明の油にて練り、それを腫物の上につける。

一、生涯食あたりをせぬために、妊婦が出産して、第一回授乳する前に、鹽小綱を全部バリバリに焼いて喰ふとよい。

一、ようちようなどの腫物が出来た時は、あをき葉を七枚煎じてそれでたでると癒る。

一、腹痛、胃病等の場合には、げんのしようこを煎じてのむとよい。

一、胃腸病には松傘の青いのを煎じて呑む。

一、なまこにあつた時は藁を煎じてのむ。

一、魚にあたりたる時は梅酢をのむ、或は生果物を食するもよし、中にも林檎は最もよろし。

一、十二指腸蟲には果物を食す、柿は最もよろし、次には林檎。

一、針をのみたる時はばれい（蠟殼を焼いて粉にせるもの）を呑む事。

一、肋膜炎にはゆづり葉六枚を黒焼きして粉末とし三度位に分服するとよい、大概一回で功を奏すれど、もしきかざれば二回迄は同様の事繰返してよし。

一、丹毒に罹りたる時は生た鰻をして、患部をははしめるときつと癒る。鰻が毒を取つて呉れるのであるから、ははした後はすぐ河に放してやらねばならぬ。

松 と 土 と 水

大概の病氣は、松と土と水とさへあつたら癒るものである、風邪其他熱のある場合には、雌松を煎じてのむとちきに熱が引く、神様にお供へしたものでならば一層結構である。お土は傷をした場合にぬりつけるよい、切瘡、火傷、打身腫物なきなんにでもよい、又、水は萬病の薬であつて、諸薬、水に越したものはないのである。熱のある場合病人が欲しがれば井戸の汲み立の水をさんくく吞ましてやつたらよい、水道の水はくたぶれ

て居る。井戸水は生氣液測として居るから井戸水に限る。私は嘗てひどい熱病患者としてさんくく水を吞まして癒してやつた事がある、醫師は一寸も水を吞ましていけないと云つて居たが、そんな事はない、水位薬になるものは無いのである。

四 苦

生、病、老、死これを四苦といつて、人生で一番苦しいものである。生れる時の苦痛が一番ひどいので、人は其苦しみによつて、自分の前生を總て忘れて仕舞つて、何も分らぬやうになるのである。次が病の苦しみ、これは大抵の人が大か小か味ははしないもの

は些^ちない、次^{つぎ}が年^{とし}とつて行く苦^{くる}しみ、だん／＼苦^{くつ}痛^{つう}が輕^{かろ}く死^しが一番^{いちばん}苦^{くつ}痛^{つう}が小^{ちひ}さいのである。



卷頭の聖師様御寫眞は青森にて御撮影 時ならぬ花満開の靈寫眞です御歌あり

青森のわがうつしゑの背景の

女松の枝に日^ひの花咲きけり

昭和三年十一月七日印刷
昭和三年十一月十三日發行

〔定價金壹圓〕 (送料金十錢)

著作者 加藤明子編

發行者 吉原常三郎
京都府龜岡町字古
世大垣内八六番地

水鏡

不許
複製

發行者 第二天堂社
京都府龜岡町天恩郷

振替大阪七五九一七番
電話 二五九番

王仁文庫

第一編 皇道我觀
 第二編 國教論集
 第三編 瑞能神歌
 第四編 記紀眞解
 第五編 道の大典
 第六編 多滿の礎
 第七編 記紀眞釋
 第八編 八面鉾
 第九編 道の色
 第十編 五道の大草

各冊特價三十五錢

本文庫は出口聖師の文章
 詩歌等をまとめたもので
 教理あり、教訓あり、諷
 刺あり、豫言あり、警告
 あり、解説あり、何れも
 金言玉辭、聖師の神授の
 大經綸と天來の大抱負の
 一端を窺ふことが出来る
 であらう。皇國臣民の必
 讀すべき大文字である。

京都府綾部町

第一天聲社發行

振替大阪六〇五三四番

靈界物語

出口聖師口述

▲靈主体從 全十二卷
 ▲如意寶珠 全十二卷
 ▲海洋萬里 全十二卷
 ▲舍身活躍 全十二卷
 ▲眞善美愛 全十二卷
 ▲山河草木 全十二卷

以下續々刊行

彌勒出現成就して始めて
 苦集滅道を説き三界を照
 破し、道法禮節を開示す
 るは、先聖既に言ふ所、
 本書は即ち彌勒の神下生
 して三界の大革新を成就
 し、神國を地上に顯現す
 るための神典である。

各一卷三百六十頁余
特價金一圓(送料共)

京都府綾部町

第一天聲社發行

振替大阪六〇五三四番

- 大本の概要 特價金 二十錢
- 大本三美歌 特價金 二十五錢
- 大本宣傳歌集 特價金 二十五錢
- 善言美詞 特價金十錢 (送料二錢)
- 祝詞略解 特價金 二十錢
- 二名日記 定價 壹圓六十錢
- 東北日記 各卷 一圓三十錢
- 王仁蒙古入記 特價金 一圓
- 神懸の話 特價金廿錢 (送料二錢)
- 曉の鳥 特價金 六十錢

發行所

京都府綾部町本宮東四ツ社

第一天下社

振替口座大阪六〇五三番四

- 靈の礎 特價金廿錢 (送料二錢)
靈界の消息死後の生活人生の本分等を平易に示せるもの
- 道の栞 特價金 七十錢
暗夜の燈火とも言べく人生の旅路に飲くべからざる神書
- 道の本 特價金 三十五錢
王仁文庫道の大本に輯録されざる分の教義に關するもの
- 神示の大和魂 特價五錢十部以上一割引
吾人が實踐躬行すべき大精神大信條を示されたるもの
- 神文 特價金十錢 (送料二錢)

發行所

振替口座大阪
六〇五三番四

第一天下社

京都府綾部町
本宮東四ツ社

眞如の光

大本瑞祥會機關雜誌
旬刊五、十五、廿五日發行
一部金十錢（送料共）

神の國

大本機關雜誌
每月一回八日發行
一部金二十錢（送料共）

瑞祥新聞

大本機關新聞
旬刊一、十一、廿一日發行
一ヶ年金五十錢（送料共）

發行所

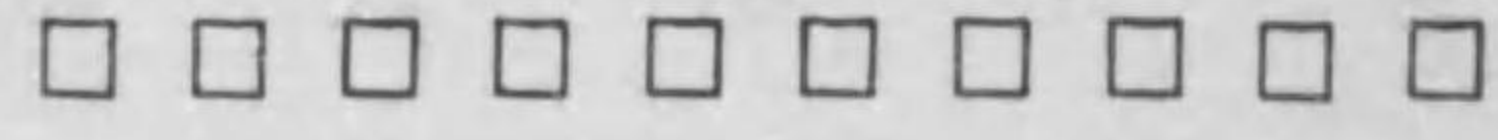
京都府綾部町 第一聲天社
大阪府東區四ツ辻
振替口座番 六〇五三番
大阪府東區大田

○讚美集 實費金五十錢にて頒つ

○大本祭式 定價金五十錢

○三五の神歌 定價金貳錢

○おかげばなし 定價金三十五錢（送料四錢）



發行所

京都府大田町 第二聲天社
大阪府東區大田
振替口座番 七一九五番
大阪府東區大田

○ 緑の世界 毎月一回一日發行
エスベラント語獨習者の手引

○ 言葉の光 毎月一回一日發行
日本式ローマ字雜誌 一ヶ年金五十錢

○ エス大本 毎月一回一日發行
大本教義の翻譯 一ヶ年金貳圓四十錢

○ エス和作歌辭典 並製一圓(送料八錢)

○ エスベラント文 定價金二十錢(送料二錢)
新精神運動大本

發行所

京都府龜岡町 大本天恩郷 第二聲社 振替口座大坂 七一九五七番

○ 英文 新精神運動 定價參拾錢(送料二錢)
支那文

○ 英文 大本須知 定價拾五錢(送料二錢)

○ エス文 死後の生活 定價拾五錢(送料二錢)

○ エス文 靈の礎 定價貳拾錢(送料二錢)

○ エス文、英文、佛文、獨文 大本は何ぞ 各定價參拾錢(送料二錢)

○ エス文 大本概要 定價五錢(送料二錢)

發行所

京都府龜岡町 大本天恩郷 第二聲社 振替口座大坂 七一九五七番

人類愛善新聞

京都府他町天恩郷
人類愛善新聞社
振替大阪七五九三一番

世界各地の精神運動の現状を傳へてそれらの融和
歸一するやう指導し、他方にまた人生百般の諸問
題につき人類愛善の精神をやさしく徹底普及させ
るやう編輯して居りますから、ごなたでも必讀の
ものとしておすゝめ致します。

旬刊
三、十三、廿三日發行
一部 金 三 錢
一ヶ年 金 一 圓
(送料共)

文藝 雜誌 明

光

京都府他町天恩郷
明 光 社
振替大阪七五九一七番
(第二天聲社)

出口瑞月聖師の監輯の下に、和歌俳句冠句なき老
幼男女を問はず何の制限も設けないでみんなで一
様に文藝趣味を楽しんで、朗かな心持を歌ひなが
ら自然に多數の人々が大和合してこの大光明を心
ゆくまでひろげてゆかうと思ふのであります。

毎月一回三十日發行
一部 金 五 十 錢
一ヶ年 金 六 圓
(送料共)

終

